

「主イエスを殺す計略」

2015年12月11日

ルカによる福音書 22章1節～6節。さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた。祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた。彼らは民衆を恐れていたのである。しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけた。彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。

「過越祭」が近づいていた。過越祭は主イエスの時代から1,300年ほど前の「出エジプト」に起源を持つイスラエル最大の祭である。イスラエル人はエジプトで奴隷の苦しみに呻吟していた。神は彼らの苦しみを憐れみ、モーセを用いて、出エジプトを約束された。諸々の事件があったが、底辺労働者の奴隷がいなくなると国家が成り立たない。エジプトのファラオは断固として出エジプトを認めない。最後に、神はイスラエル人の家の鴨居と柱に羊の血を塗ることを命じられた。血の塗られたイスラエル人の家を主は過越し、塗られていないエジプト人の家に主は入り、初子をことごとく殺害された。この事件によって、ファラオは出エジプトを認めざるを得なかった。主の過越と言われる事件が歴史的事実であるならば、圧迫を強いられたイスラエル人によるテロリズムであろう。神ご自身が手を下して、人を殺害することは決してないからである。イスラエル人にとって、主の過越は奴隷からの解放という決定的な出来事になった。彼らは、神が与えてくださった民族解放の喜びを「過越祭」という形で、時代を超えて祝い合った。この祭にはユダヤに住む人々はもちろん、遠く異邦の地で暮らす人々も大挙してエルサレム神殿に巡礼に集まった。ユダヤ人は、現在も過越祭を守り続けている。

神殿当局の祭司長や律法学者たちは、何としても主イエスを殺害したいと思っていた。主イエスは民衆の生活を管理していた律法を破り、神に愛されている人間の尊厳を鮮やかに示された。それは、権威ある宗教家たちが営々と築きあげてきた律法による差別管理体制を壊すことであった。主イエスの言動を危険視し、許せないと考えた。また、主イエスは「アンナス広場」で暴利を貪る両替人やいけにえの動物を売る商人たちを追い出し、腰掛を倒し、暴力的な振る舞いで、抗議した。それは、神殿当局のメンツが潰されることであった。主イエスを殺害する目論みは強いものになっていた。しかし民衆は、主イエスの権力を恐れぬ言動に賛意を持って支持していたので、彼らを恐れ、手出しできないでいた。どんなに強権を持っていようとも、民衆の支持がなければ、暴挙に踏み切れない。彼らのジレンマは深かった。

その時、主イエスの12弟子の一人であったイスカリオテのユダは自分の師イエスを売ろうと、祭司長や神殿守衛長たちの所に行き、どのように主イエスを引き渡そうかと相談を持ちかけた。彼らは喜び、金を与えることにした。ユダは承諾し、民衆のいない時に、主イエスをひそかに引き渡す機会を狙うようになった。「ユダの中に、サタンが入った」と記している。サタンとは人間を否定する悪意であろう。人は皆、愛と真実を虚偽とするサタンにしばしば捕われる。しかし、自分の中に棲みつくサタンを知る者は主イエスの十字架と復活の「赦し」を最大の恵みと信じ、感謝して受け止める。